

議論を「見える化」する技法を身につけるための取り組み -ディスカッションの進行を促進させるために-

保健福祉学部看護学科 山中道代、黒田寿美恵、
宮本奈美子、吉田なよ子、土路生明美、笠置恵子

はじめに

看護学科では、シミュレーション教育の導入・強化のために、ファシリテーションやデブリーフィング技術などの学びを引き出す技術の習得を目指してきた。その内容は、平成22年度の「模擬患者参加型看護教育の見直しと再構築」の取り組みから始まり、平成23年度は「教員のファシリテーション能力強化のための取り組み」、平成24年度は「学生の学びを引き出す技法を身につけるための取り組み」、平成25年度は「シミュレーション教育の技法を活用する実践力を身につける取り組み」と続き、平成26年度の「議論を『見える化』する技法を身につけるための取り組み-ディスカッションの進行を促進させるために-」へ繋がっていった。

議論を「見える化」とは、議論のプロセスや内容を表現（可視化）し、ばらばらの発言を「描いて見せる」ことである。これにより、議論の場を言葉が飛び交うだけでなく、プロセスの共有と対等な参加がなされる場へと変化させる効果がある。これをより効果的に行うための技術が「ファシリテーション・グラフィック」で、話し合いの中で出た膨大な数の意見の中から同じものをまとめたり、順番に並べるといった議論の構造化を助けるものである。また、堀は自身の著書のまえがきに、「議論を『見える』ようにすることは、協働意識を高め、話し合いの質を高め、そして話し合いの成果と参加者の納得感を高めることにつながる¹⁾。これらの効果は、グループワークの中で私たちが期待している成果と一致することから、ファシリテーション・グラフィックの技術を身につけることは、教育効果を上げることになると考えた。さらに、可視化の技術は講義における板書を効果的に行うことに応用できると考えている。講義内容や学生が自由に発言する内容を、プロセスが共有できる形で表現することは、納得感を高めることにつながる。このような様々な効果を期待して、ファシリテーション・グラフィックを身につけることに取り組むこととした。

本取り組みの目的は、(1) ファシリテーション・グラフィックの基本を学ぶ、(2) 議論の内容を可視化する力を実践的に身につけることで、本事業に参加した教員が、講義・演習・実習におけるディスカッションの場で、議論の内容を可視化できるようになる、とした。

1. 抄読会と模擬会議の開催

他キャンパスからの参加が可能となるよう夏休み



写真1 抄読会で学んだことを模擬会議で実践している様子。板書しながら議論を進めることに難しさを感じることもあった。

期間を利用して、抄読会と模擬会議を2日に分けて実施した。1回目（抄読会）の参加者は20名（看護学科：18名、作業療法学科：1名、生命科学科：1名）で、2回目（模擬会議）の参加者は16名（看護学科13名、作業療法学科2名、生命科学科：1名）であった。

抄読会は「ファシリテーション・グラフィック-議論を『見える化』する技法-」を使用し、研修会のための基礎知識獲得の場としての位置づけとした。書かれている内容について議論することで、参加者の理解を深めた。

模擬会議は抄読会で得た知識を活用しファシリテーション・グラフィックを体験することと目的として行った。提示されたテーマについて議論し、その内容をファシリテーション・グラフィックの技術を活用し可視化した。1回の抄読会と各自の復習による知識のみで実施したため、「まとめるのが難しい」などの感想があったが、「なかなか楽しい」のように、可視化して議論を進めることの効果を感じる参加者もあった。

2. 研修会の開催

日本ファシリテーション協会フェローでもある加留部貴行先生（九州大学大学院総合新領域学府客員准教授）を招き、平成26年12月24日にファシリテーション・グラフィックの研修会を開催した。参加者は16名（看護学科：13名、人間福祉学科：1名、生命科学科：1名、総合教育センター：1名）であった。研修会は、可視化することの効果を経験することを目指し企画し、講師には、抄読会に参加していれば理解が深まり、抄読会に参加していなくても概要が理解できるような内容を依頼した。時間配分や



写真2 研修会の様子。講義と演習が絶妙なタイミングで組み立てられており、飽きさせない内容であった。

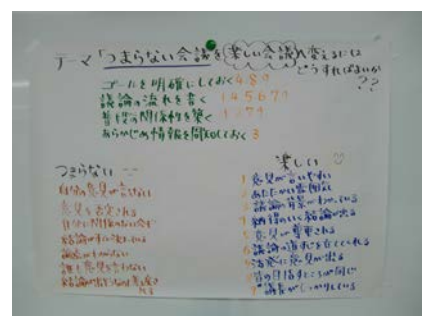
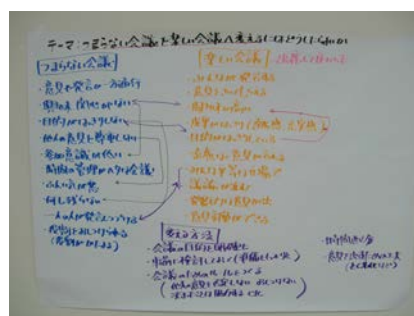
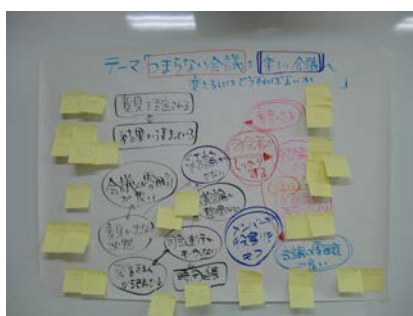


写真3 研修会で行った議論を可視化した成果物。同じテーマが提示されていたが、まとめ方はそれぞれであることが分かる。可視化の技術により、プロセスの共有化の程度に差が生じる。

内容の構成については講師に一任した。実際には、演習と講義を織り交ぜて行われ、「音読されている内容を聴く」「対話を聴く」「発言内容を聴く」などの「聴く」ことの難しさを感じながら、可視化することを体験することができる内容となっていた。

実施後のアンケートでは、ファシリテーション・グラフィックの技術が教育活動に活かせるとし

ながらも、自身の「要約する力」の必要性を感じたり、聴く姿勢について考える機会となるなど、各自の課題を意識することができる研修会となった。

3. 期待される効果

- 1) 「可視化」の技術を用いて発言内容を要約し、整理・統合することができれば、参加者相互の理解を深めることができる。これは、グループワークやカンファレンスの場における学習効果を高めることでもある。
- 2) 教員が議論の内容を可視化する技術を実践することは、学生にとっての実践モデルとなる。教員が手本を示すことで、議論の中でリーダーシップが取れる人材育成につながる。

4. 今後の課題

ファシリテーション・グラフィックは、訓練すれば誰でも身につけられる技術とされている。しかし、別の言い方をすると、身につけるためには訓練が必要ということで、今回の研修会に参加しただけでは、効果的に活用できないということでもある。今後は、教員一人一人が意識してこの技術を活用し、技術を高める姿勢を持ち続けることが重要である。

【引用・参考文献】

- 1) 堀公俊、加藤彰：ファシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法．東京、日本経済新聞出版社、2006
- 2) 堀公俊：ファシリテーション入門．東京、日本経済新聞出版社、2004